

疫学研究推進グループ「出生コホートネットワーク」設置趣意書

趣旨

最近の出生コホート研究はネットワークを構築し、様々な形で連携することが世界的な潮流となっています。例えば、出生コホートのネットワーク Birthcohorts.net には、ヨーロッパを中心に、1980 年以降に開始された母児 300 組以上の規模の約 130 の出生コホートが登録され、収集されたデータと生体試料に関する情報が、採取時期とともにデータベースに登録されています。小規模な共同研究から大規模なコホート連携まで、ニーズに合った形で利活用できるよう公開されています。また、2017 年には、ヨーロッパ全体にわたって総計 25 万人以上の参加者のデータ資源を持つ数十のヨーロッパの出生コホートによって EU Child Cohort Network が設立されました。最新の IT 技術を駆使し、データ共有プラットフォームを構築し、ライフサイクルにおける健康に関する諸問題を解決することを目指すライフサイクルプロジェクトが開始されました。プロジェクト終了後も、ヨーロッパ全域を対象とし、オープンで持続可能なネットワークを目指しています。このようにヨーロッパの出生コホートは連携を深め、ライフコースの視点から、健康課題の克服を目指しています。

日本の出生コホート研究は、これまで連携することが乏しかったのですが、2015 年には科学技術振興機構研究開発戦略センターによって、先制医療を精緻化するために、今後推進すべき重要テーマを政策提言として取りまとめられました。特に、胎児期～小児期の研究の重要性を説き、その共通基盤として、中核機関や組織の設定と人材確保、次世代育成が重視されました。また、「ライフステージに応じた健康課題の克服」が政府の定める「医療分野研究開発推進計画」に明記され、国や地方自治体の重要施策として取り上げられるようになってきました。2019 年には、日本疫学会と日本 DOHaD 学会が連携して、出生コホート研究連携ワークショップを開催しました。その中で、インフラ整備、データ統合、生体試料、データヘルス、早期介入の 5 テーマに関して、参加者によるグループディスカッションを行い、提言を取りまとめました。2019 年度には、東北メディカル・メガバンク事業三世代コホート調査、環境と子どもの健康に関する研究・北海道スタディ、こども調査・胎児期に始まる子どもの健康と発達に関する調査、成育出生コホート研究、浜松母と子の出生コホート研究、BOSHI 研究の 6 出生コホート研究が中心となり、日本医療研究開発機構（AMED）成育疾患克服等総合研究事業—BIRTHDAY に研究開発課題「出生コホート連携に基づく胎児期から乳幼児期の環境と母児の予後との関連に関する研究」が採択され、出生コホート連携研究班が発足しました。現在、各コホートで低出生体重等の健康影響に関して、メタアナリシスの準備を進めています。今後、Individual Participant Data (IPD) のメタアナリシス、バイオバンク機能を活かし、生体試料を用いたオミックス解析、早期バイオマーカーの開発等が大いに期待されます。

本疫学推進グループでは、出生コホート研究に従事している研究者やこれから参加したいと思っている研究者を対象に、日本疫学会と出生コホートと関連の深い他学会と協力して合同研修会、セミナー等を開催する予定です。さらに、出生コホートネットワークを構築し、各コホートの最新の情報提供、研究者間の意見交換、研究交流を促進することによって出生コホート連携基盤を構築するとともに教育研修などによって若手研究者の人材育成にも力を入れたいと考えています。

DOHaD やライフコース疫学に関心のある多くの研究者の参加を期待しております。

2021年2月19日

疫学研究推進グループ「出生コホートネットワーク」発起人

岸 玲子

栗山 進一

佐田 文宏

清水 厚志

土屋 賢治

堀川 玲子

目時 弘仁

森崎 菜穂

森 千里